

色ベタ (前号流用)  
(or スミベタ)志賀 卓弥  
SHIGA Takuya東北大学病院  
産学連携室岩手県出身  
北里大学・2005年卒業

## &lt;所有資格&gt;

麻酔科標榜医 / 日本専門医機構麻酔科専門医 / 麻酔科指導医 / 集中治療専門医 / 日本医師会認定産業医 / 緩和ケア認定医 / 検診マンモグラフィ読影認定医

## ■座右の銘

少年老い易く学成り難し  
一寸の光陰軽んずべからず

## ■医療に関する特技

ECMO

## ■これからの目標

まず、スタートアップを成長させ、exit (上場やM & Aにより投資家へリターンを返す) を目指します。その後、もう一度臨床に貢献したいです。アカデミアとして、臨床、研究、教育、ビジネススキル、投資、二度の災害経験といった複合的な視点を持った医師として、臨床だけでなく、産学連携やスタートアップ支援、アントレプレナーシップ教育といった、ソーシャルインパクトを与える仕事をしていきたいと考えています。

## ■message

人生は一度きりです。やるべきこと、やれること、やりたいことは人それぞれ異なります。日々やるべきことで忙殺されているとは思いますが、やれることを増やすこと、やりたいことに時間を費やすことは、人を豊かにし、結果イノベティブなアウトプットに繋がると信じています。タスクだけこなすだけではつまらないですよ。やるか、やらないかは、あなたにしか決められないことです。

## みんなのプロフィール帳

## ◆ 医師を志した動機 ◆

父が形成外科医であり、日本で最初の形成外科教室である昭和大学形成外科教室初代教授の鬼塚卓弥先生より、名前を頂戴した。当然医師になって、形成外科医になるものだと思っていた。

## 医学部卒業からこれまでの歩み

## 1 年目 (2005 年): 仙台市立病院 初期研修

渡米も視野に、有名研修病院で研修の予定だったが、父の体調の関係で、土壇場で仙台に戻ることに。外科部長がポート部出身で、自身もポート部で主将だったことから、流れで採用。形成外科へ進むつもりで外科研修コースを選択。

## 2 年目 (2006 年):

救急センターの上のレジデンスに住む。優秀な同期に恵まれ、必死に勉強。今では怒られるが、救急車が来ると OFF でも皆が集まって一緒に診療した。形成外科で熱傷診療をするため、集中治療を身につけたいと思い、当時 ICU を管理していた麻酔科を回ることになった。

## 3 年目 (2007 年): 亀田総合病院感染症科 エクスターンシップ

集中治療では感染症診療は必須と感じ、3 年目早々に岩田健太郎氏のところへ感染症研修へ。プログラム対象外であり、休職して研修した。東北大学の形成外科に入局するか、仙台市立病院の麻酔科に残るか悩んだ末、もう少し麻酔の勉強をしようと麻酔科へ残留。

## 4 年目 (2008 年): 仙台市立病院 麻酔科

救急外来で VT/VF 症例に蘇生後低体温療法 (現在の TTM) にハマリ、VA-ECMO 使った ECPR + 低体温療法を指導いただいた。

## 5 年目 (2009 年): 麻酔科標榜医 取得、結婚

無謀にも単独で蘇生後低体温療法の研究をすべく科研費申請を試みるも、分担事務員を確保できず断念。東北大学大学院進学を考え始める。結婚。妻は留学し、新婚早々まさかの一人暮らし。

## 6 年目 (2010 年): 宮城県立こども病院、仙台厚生病院で研修

麻酔科部長から、大学入局前に小児麻酔と心臓麻酔の研修機会を与えていただいた。

## 7 年目 (2011 年): 東北大学麻酔科入局、東北大学病院重傷病棟配属、東日本大震災、東北大学大学院入学

体外循環の興味から人工心臓の研究へ。ICU で東日本大震災被災。災害医療を目的の当りにする。被災地の深部静脈血栓症スクリーニングボランティアなどに参加。

## 9 年目 (2013 年): 麻酔科専門医取得、第一子誕生

前年から人工心臓の研究に没頭。凝固機能異常や右心循環の難しさを痛感する。そんな中第一子誕生。

## 10 年目 (2014 年): 研究データがまとまったため大崎市民病院へ臨床復帰

学外で臨床しながら博士論文をまとめ、提出。大学初ベンチャーが開発した人工心臓を用いて研究していたため、スタートアップや産学連携に興味をもつ。悩んだ末、ビジネススクールに行くことを決意。

11 年目 (2015 年): 慶應義塾大学経営管理研究科 (KBS) 入学、集中治療専門医取得  
妻を残し神奈川に単身赴任 (許してくれた妻に感謝)。会計学から組織論、戦略コンサルなど、医学とは違った世界を体験。ここで費用対効果の QALY や ICER を学んだ。

## 12 年目 (2016 年): KBS 在学中に起業、第二子誕生

第二子誕生。妻も研修で神奈川に同居。株式会社エビグノシステムズ (現株式会社エビグノ) を創業。大学発スタートアップの成功要因を修士論文でまとめ、MBA 修了。

## 13 年目 (2017 年): 東北大学病院 集中治療部

## 14 年目 (2018 年): 麻酔科指導医 取得

## 16 年目 (2020 年): COVID-19 アウトブレイク

副部長 (実務責任者) 就任。集中治療部で COVID-19 重症患者の受け入れを決める。感染経路がまだわからなかったため、家族への感染が不安でしばらく自宅に帰らず。遺書を書いた。宮城県新型コロナウイルス対策本部重症担当本部員を拝命し、県内の重症患者のベクトルコントロールを実施。東北大学病院の機能を落とさず、COVID-19 の対応に奔走。

## 19 年目 (2023 年): COVID-19 収束、機構認定麻酔科専門医 取得

自分の中で集中治療に一定の納得ができた。東北大学病院産学連携室副室長の就任依頼。スタートアップの経営へ軸足を置く。東北大学病院集中治療部を去る決意。

## 21 年目 (2025 年): 日本集中治療医学会 平澤賞

## 医学部卒業からこれまでの歩み

## 1 年目 (2005 年): 仙台市立病院 初期研修

渡米も視野に、有名研修病院で研修の予定だったが、父の体調の関係で、土壇場で仙台に戻ることに。外科部長がポート部出身で、自身もポート部で主将だったことから、流れで採用。形成外科へ進むつもりで外科研修コースを選択。

## 2 年目 (2006 年):

救急センターの上のレジデンスに住む。優秀な同期に恵まれ、必死に勉強。今では怒られるが、救急車が来ると OFF でも皆が集まって一緒に診療した。形成外科で熱傷診療をするため、集中治療を身につけたいと思い、当時 ICU を管理していた麻酔科を回ることになった。

## 3 年目 (2007 年): 亀田総合病院感染症科 エクスターンシップ

集中治療では感染症診療は必須と感じ、3 年目早々に岩田健太郎氏のところへ感染症研修へ。プログラム対象外であり、休職して研修した。東北大学の形成外科に入局するか、仙台市立病院の麻酔科に残るか悩んだ末、もう少し麻酔の勉強をしようと麻酔科へ残留。

## 4 年目 (2008 年): 仙台市立病院 麻酔科

救急外来で VT/VF 症例に蘇生後低体温療法 (現在の TTM) にハマリ、VA-ECMO 使った ECPR + 低体温療法を指導いただいた。

## 5 年目 (2009 年): 麻酔科標榜医 取得、結婚

無謀にも単独で蘇生後低体温療法の研究をすべく科研費申請を試みるも、分担事務員を確保できず断念。東北大学大学院進学を考え始める。結婚。妻は留学し、新婚早々まさかの一人暮らし。

## 6 年目 (2010 年): 宮城県立こども病院、仙台厚生病院で研修

麻酔科部長から、大学入局前に小児麻酔と心臓麻酔の研修機会を与えていただいた。

## 7 年目 (2011 年): 東北大学麻酔科入局、東北大学病院重傷病棟配属、東日本大震災、東北大学大学院入学

体外循環の興味から人工心臓の研究へ。ICU で東日本大震災被災。災害医療を目的の当りにする。被災地の深部静脈血栓症スクリーニングボランティアなどに参加。

## 9 年目 (2013 年): 麻酔科専門医取得、第一子誕生

前年から人工心臓の研究に没頭。凝固機能異常や右心循環の難しさを痛感する。そんな中第一子誕生。

## 10 年目 (2014 年): 研究データがまとまったため大崎市民病院へ臨床復帰

学外で臨床しながら博士論文をまとめ、提出。大学初ベンチャーが開発した人工心臓を用いて研究していたため、スタートアップや産学連携に興味をもつ。悩んだ末、ビジネススクールに行くことを決意。

11 年目 (2015 年): 慶應義塾大学経営管理研究科 (KBS) 入学、集中治療専門医取得  
妻を残し神奈川に単身赴任 (許してくれた妻に感謝)。会計学から組織論、戦略コンサルなど、医学とは違った世界を体験。ここで費用対効果の QALY や ICER を学んだ。

## 12 年目 (2016 年): KBS 在学中に起業、第二子誕生

第二子誕生。妻も研修で神奈川に同居。株式会社エビグノシステムズ (現株式会社エビグノ) を創業。大学発スタートアップの成功要因を修士論文でまとめ、MBA 修了。

## 13 年目 (2017 年): 東北大学病院 集中治療部

## 14 年目 (2018 年): 麻酔科指導医 取得

## 16 年目 (2020 年): COVID-19 アウトブレイク

副部長 (実務責任者) 就任。集中治療部で COVID-19 重症患者の受け入れを決める。感染経路がまだわからなかったため、家族への感染が不安でしばらく自宅に帰らず。遺書を書いた。宮城県新型コロナウイルス対策本部重症担当本部員を拝命し、県内の重症患者のベクトルコントロールを実施。東北大学病院の機能を落とさず、COVID-19 の対応に奔走。

## 19 年目 (2023 年): COVID-19 収束、機構認定麻酔科専門医 取得

自分の中で集中治療に一定の納得ができた。東北大学病院産学連携室副室長の就任依頼。スタートアップの経営へ軸足を置く。東北大学病院集中治療部を去る決意。

## 21 年目 (2025 年): 日本集中治療医学会 平澤賞